特240
77

納本

三典歌

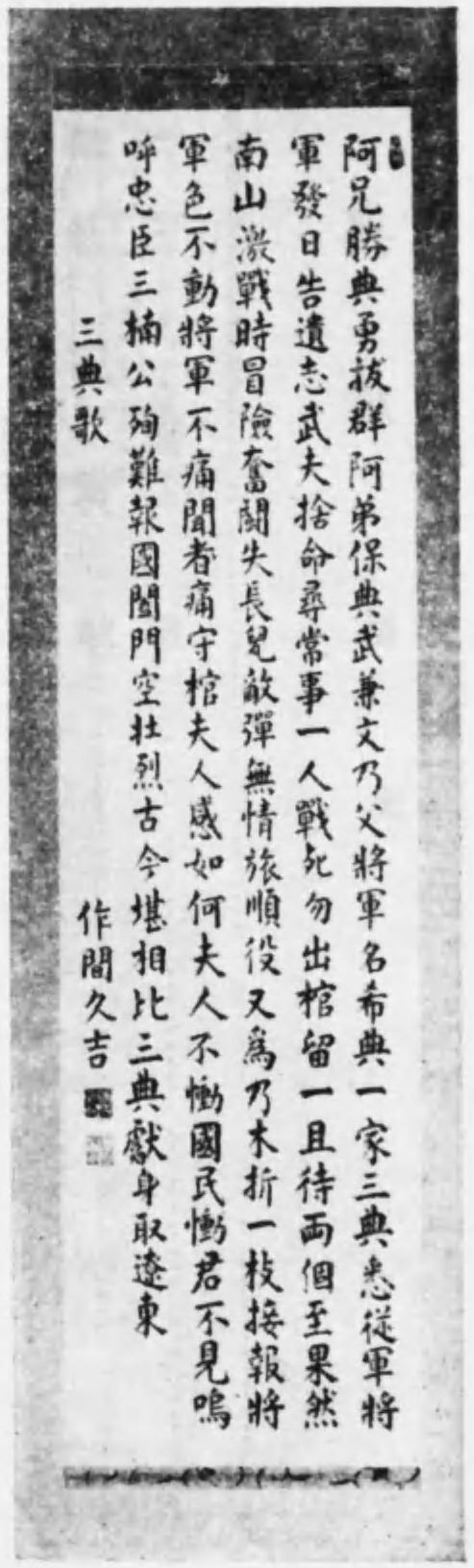
山口縣立教育博物館

始

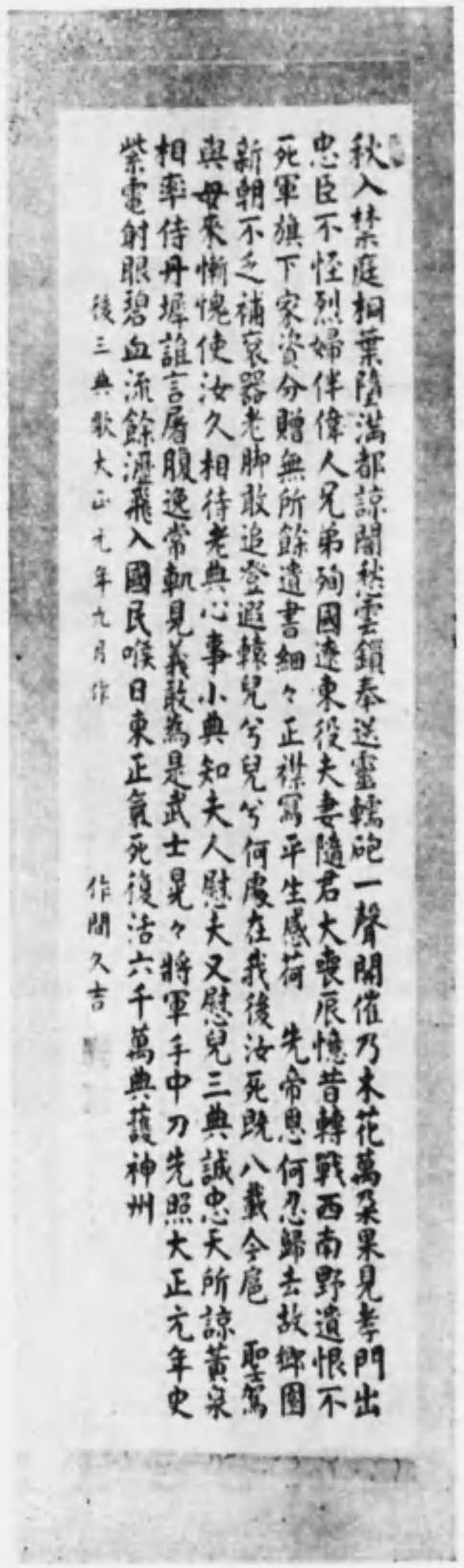
特240
77

表紙の寫眞は、乃木將軍が、明治三十七年、第三軍司令官として東京を出發、征途に上られ、五月三十日の朝、廣島の吉川旅館で、長子勝典中尉戰死の報に接し、勝典保典兄弟出征記念寫眞の種板を手に持つて撮られたもので所謂三典報國の寫眞である。

―― 京都　中川忠三郎氏提供 ――


阿兄勝典勇拔群阿弟保典武兼文乃父將軍名希典一家三典悉從軍將軍發日告遺志武夫捨命尋常事一人戰死勿出棺留一且待兩個至果然南山激戰時冒險奮闘失長兒敵彈無情旅順役又爲乃木折一枝接報將軍色不動將軍不痛聞者痛守棺夫人感如何夫人不慟國民慟君不見嗚呼忠臣三楠公殉難報國閣門空壯烈古今堪相比三典獻身取遼東

三典歌　作間久吉


秋入禁庭桐葉陰滿都諒闇秋雲鎖奉送靈轜砲一聲聞儵乃木花萬朶果見孝門出忠臣不怪烈婦伴偉人兄弟殉國遼東役夫妻隨君大喪辰憶昔轉戰西南野遺恨不死軍旗下家資分贈無所餘遺書細々正襟寫平生感荷　先帝恩何忍歸去故鄉園新朝不乏補袞器老脚敢追登遐轅兒兮兒兮何處在我後汝死既八載今庵　聖駕與母來慚愧使汝久相待老典心事小典知夫人慰夫又慰兒三典誠忠天所諒黃泉相率侍丹墀誰言屠腹逸常軌見義敢爲是武士晃々將軍手中刀先照大正元年史紫電射服碧血流餘瀝飛入國民喉日東正氣死復活六千萬典護神州

後三典歌大正九年九月作　作間久吉

三典歌目次

㈠序……一
㈡三典歌……二
㈢後三典歌……五
㈣三典歌由來……九
(イ)三典歌の賦呈……九
(ロ)殉死三日前の贈答……一五
(ハ)後三典歌の詩作……一九
㈤三典歌餘話……二〇
(イ)富嶽の圖……二〇
(ロ)飲氷室文集……二一
(ハ)資料の保存……二二

（一）序

「三典歌」は、明治三十七年十二月、作間鴻東先生が、旅順攻圍中の乃木將軍に、賦して呈せられた七言古詩である。

その後、八年の歳月が過ぎて、大正元年九月、乃木將軍殉死の當時、別項「三典歌由來」に記す如き事情で、更に、作間先生は、將軍一門の正氣純忠に感激し、「後三典歌」を賦し之を弔はれた。

前三典歌、後三典歌、共に、我武士道の氣慨を寫し出し、日本精神の眞髓躍如として紙背に徹し、之を吟ずれば、自ら人をして、悲傷暗涙に咽ばしめ、また感憤興起せしめ、國民至誠純忠の志氣を鼓舞し、感動措く能はざらしめる。

(二) 三典歌

明治三十七年十二月乃木將軍に賦呈す

作間鴻東作

阿兄勝典勇拔群
阿弟保典武兼レ文
乃父將軍名希典
一家三典悉從レ軍。
將軍發日告二遺志一
武夫捨レ命尋常事
一人戰死勿レ出レ棺
留レ一且待兩個至。

(下段は、作間先生の口授による讀み方である)

阿兄は勝典、勇拔群、
阿弟は保典、武、文を兼ぬ、
乃父の將軍、名は希典、
一家三典、悉く軍に從ふ。
將軍發するの日、遺志を告ぐ、
武夫命を捨つるは尋常の事、
一人戰死するも棺を出す勿れ、
一を留めて且らく待てよ、兩個の至るを。

果然南山激戰時
冐レ險奮鬪失二長兒一
敵彈無情旅順役
又爲二乃木一折二一枝一。
接レ報將軍色不レ動
將軍不レ痛聞者痛
守レ棺夫人感如何
夫人不レ慟國民慟。
君不レ見
嗚呼忠臣三楠公
殉難報國闔門空
壯烈古今堪二相比一
三典獻身取二遼東一。

果然、南山激戰の時、
險を冐して奮鬪、長兒を失す、
敵彈無情なり、旅順の役、
又乃木の爲に一枝を折る。
報に接して、將軍色動かず、
將軍痛まず、聞く者痛む、
棺を守るの夫人、感如何、
夫人は慟せず、國民慟す。
君見ずや、
嗚呼、忠臣三楠公、
殉難報國、闔門空し、
壯烈古今相比するに堪へたり、
三典、身を獻じて遼東を取る。

註 ○三典　父陸軍大將乃木希典（まれすけ）、長子陸軍步兵中尉乃木勝典（かつすけ）、次子陸軍步兵少尉乃木保典（やすすけ）の三人をいふ。

○作間鴻東　名は久吉、山口の人、（後に註す）

○南山　關東州金州驛の西七町、高さ一〇〇米に足らぬ小山であるが、日露の戰跡として名高い。今なほ露軍の掘つた塹濠の跡を殘し、また山腹には金州の支那人が我軍の忠烈に感激して建立した昭忠碑がある。其他戰蹟塔などが設けられ參拜者が多い。

○南山の激戰　明治三十七年五月二十六日、わが第二軍は、金州南山の敵壘を猛攻し、言語に絕する惡戰苦鬪の後、遂に之を攻略した。よつて遼東半島に於ける露軍を二分し、旅順方面の敵を孤立させわが作戰を極めて有利に展開させた。

過金州城　　乃木希典

山川草木轉荒涼　十里風腥新戰場
征馬不前人不語　金州城外立斜陽

○旅順　遼東半島の南端にある、古來水陸の要衝として屯營を置いた所で、日淸戰役には我軍激戰一日で全要塞を陷落し、その後ロシヤの租借地となりロシヤはこれを東亞經略の根據地として所謂難攻不落の要塞を構築したが、日露戰役の起るに及びわが軍は海陸兩面より攻圍すること殆んど一年、遂に明治三十八年一月一日全く攻略し、戰後わが租借地となり今日に至つた。市街の人口凡二萬五千、其內內地邦人一萬餘。旅順の世に名高きは日露戰役の戰蹟であるためで、爾靈山、鷄冠山、松樹山、蟠龍山など幾多の堡壘、紀念碑、白玉山の表忠塔など、當年奮戰の狀を今なほ目のあたりに傳へ、每年戰跡を訪ふもの幾萬の多きに上る。

○旅順の役　明治三十七八年の日露戰役に、露國は旅順を其太平洋艦隊の根據地とし、難攻不落の堡壘を築き、ステッセル將軍を防禦總督とし、精兵五萬を以て守備を固めた。皇軍は明治三十七年五月南山の戰に勝つて旅順を孤立に陷れ、やがて旅順攻圍軍として第三軍を編成し、乃木將軍を其司令官とした。旅順の要塞攻守戰は爾後八ヶ月に亘り總攻擊を行ふこと前後四回、眞に屍山血河の激戰を繰返し、壯烈悲慘な肉彈戰によつて、終に明治三十八年一月一日落城させることが出來た。旅順戰史を繙いて、擘を呑み襟を霑さぬもの無く、また、其光景、其軍容、如何なる壯語も形容し得ざる程である。

爾靈山　　乃木希典

爾靈山險豈難攀　男子功名期克艱
鐵血覆山山形改　萬人齊仰爾靈山

○三楠公　大楠公楠木正成、小楠公楠木正行、及び楠木正儀をいふ。

（三）後三典歌　　作間鴻東作

大正元年九月　賦す
（下段は、作間先生の口授による讀み方である）

秋入㆓禁庭㆒桐葉墜
滿都諒闇愁雲鎖
奉㆑送㆓靈輀㆒砲一聲
開催乃木花萬朶。

秋は禁庭に入つて、桐葉（トウヨウ）墜つ、
滿都諒闇（リヤウアン）、愁雲とざす、
靈輀（レイジ）を送り奉る、砲一聲、
開催す、乃木の花萬朶（はなバンダ）。

果見孝門出忠臣
不怪烈婦伴偉人
兄弟殉國遼東役
夫妻隨君大喪辰。
憶昔轉戰西南野
遺恨不死軍旗下
家貲分贈無所餘
遺書細々正襟寫。
平生感荷先帝恩
何忍歸去故鄕園
新朝不乏補袞器
老脚敢追登遐轅。

果して見る、孝門の忠臣を出すを、
怪しまず、烈婦の偉人に伴ふを、
兄弟、國に殉す、遼東の役、
夫妻、君に隨ふ、大喪の辰。
憶ふ 昔轉戰す、西南の野、
遺恨なり、軍旗の下に死せざるを、
家貲分贈、餘す所無し、
遺書細々、襟を正して寫す。
平生感荷す、先帝の恩、
何ぞ忍びんや、故鄕の園に歸去するを、
新朝乏しからず、補袞の器、
老脚敢て追ふ、登遐の轅。

兒兮兒兮何處在
我後汝死既八載
今扈聖駕與母來
慚愧使汝久相待。
老典心事小典知
夫人慰夫又慰兒
三典誠忠天所諒
黃泉相率侍丹墀。
誰言屠腹逸常軌
見義敢爲是武士
晃々將軍手中刀
先照大正元年史。

兒や、兒や、何れの處にか在る、
我、汝の死に後るゝこと既に八載、
今 聖駕に扈して母とともに來る、
慚愧す、汝をして久しく相待たしむるを。
老典の心事、小典知る、
夫人、夫を慰め、又、兒を慰む、
三典の誠忠、天の諒する所、
黃泉相率ひて、丹墀に侍す。
誰か言ふ、屠腹、常軌を逸すと、
義を見て敢て爲すは、是れ武士、
晃々たり、將軍手中の刀、
先づ照らす、大正元年の史。

紫電射レ眼碧血流
餘瀝飛入國民喉
日東正氣死復活
六千萬典護二神州一。

紫電眼を射て碧血流る、
餘瀝飛び入る國民の喉、
日東の正氣、死して復た活く、
六千萬典、神州を護らん。

註 ○禁庭（キンテイ） 天皇の御所、天皇の御庭、
○諒闇（リヤウアン） 天皇皇后皇太后などの崩御せられて上下皆喪に居らるゝの間、
○靈轜（レイジ） ひつぎを載せた車、
○遼東の役 明治三十七八年の日露戰役をいふ。
○大喪の辰 明治四十五年七月三十日、明治天皇崩御あらせられ九月十三日大喪を行はせ給ふ。
○西南の野 明治十年西南の役にあたり、乃木將軍は第十四聯隊長心得として、二月二十二日、部下聯隊の一部を率ゐ熊本城に入らんとして果さず、植木附近の戰鬪で軍旗を失つた。此事將軍終生の一大痛恨事とし、後年殉死の動機となつたことは、將軍遺書の通りである。
○先帝の恩 明治天皇の御仁德を仰ぎいふ。
○補袞の器（ホコンノキ） 宰相たるべき人物、
○登遐（トウカ） 天子の崩御を申し奉る語、
○老典 乃木希典をいふ。
○小典 勝典保典の二子をいふ。
○黃泉 死者の行くところ、よみち。
○丹墀（タンチ） 赤漆にて塗り込めた庭、朝廷に限りて設く。
○屠腹（トフク） 腹を切る、切腹。
○六千萬 當時わが日本の總人口大約六千萬人についていふ。

(四) 三典歌由來

(イ) 三典歌の賦呈

明治三十七年、日露戰役に、乃木將軍は、第三軍司令官として征途に上り、長子勝典、次子保典も、また共に征露の軍に從ひ出征した。豫て、心中期する所のあつた將軍は、家を出る時、柩が三つ揃ふまでは、葬式を出すなど言ひ遺されたといふ。勝典中尉は、五月廿六日、金州城の攻擊に、露軍の機關銃の彈雨を猛然突破せんとして重傷を受け、遂に起たず、保典少尉は、旅順二〇三高地の猛攻奪取に當り、十一月三十日、壯烈な戰死を遂げた。兄中尉は、年齡二十六、弟少尉は、漸く二十四、二本の若木の櫻は、老木に先だち、大陸滿洲の嵐に散つたのである。

さすがに武門の一家とはいひ乍ら、之を聞いて誰しも同情に堪へぬのであつたが、就中、作間鴻東先生は、長詩三典歌を賦し、將軍の自重せられんことを庶幾し、懇篤なる慰問狀

に添へ、陣中の乃木將軍に送つた。それは明治三十七年十二月のことで、將軍の陣中の日記に、

> 同　廿三日、好晴、
> （前チ略ス）
> 〇杉翁ヨリ來書。山口ノ作間久吉ヨリ來書、有詩。（後チ略ス）

との一節がある。（註　同廿三日は十二月廿三日）

當時、時事新報に、特派員江森氏の通信が掲載せられて、三典歌のことが傳唱せられた。當時の狀況が詳悉されので、こゝに援用する。

時事新報　明治三十八年一月七日記事

三典歌

特派員　江　森　生

周防の人、作間鴻東氏、頃日一書を攻擊軍司令官に寄せ、附するに三典歌を以てす、作間氏の如何なる人なりやは陣中何人も之を詳かにせるものなし、想ふに乃木少尉の戰死に感激し、一片の感慨抑へんと欲して已む能はず、滿腔の所懷を此長篇に披瀝せしものならん。書に曰く、

> 謹上
>
> 旅順の戰報に接する每に、誰か閣下の勤勞を思はざらん、曩には、令息勝典君の南山に名譽の戰死を遂げたまへるあり、今又次子保典君の二〇三高地へ身命を捧げ玉ひしを聞く．閣下に於ては固より期する所なるべきも、閣下の英風を敬慕するもの、豈悽然の情に堪ふべけんや、雲烟萬里、營庭へ拜趨して弔意を述ぶるを得ず、遙に拙代を献じ奉る。閣下の一身は、上下の倚賴する所、冀くは千萬保重せられんことを。
>
> 十二月十六日
>
> 周防國山口町
> 作　間　久　吉
>
> 乃木將軍閣下

三典歌賦呈乃木將軍閣下

阿兄勝典勇拔群　阿弟保典武兼文
乃父將軍名希典　一家三典悉從軍
將軍發日告遺志　武夫捨命尋常事
一人戰死勿出棺　一留且待兩個至
果然南山激戰時　冒險奮鬪失長兒
敵彈無情旅順役　又爲乃木折一技
接報將軍色不動　將軍不痛聞者痛
守棺夫人感如何　夫人不慟國民慟
君不見
嗚呼忠臣三楠公　殉難報國闔門空
壯烈古今堪相比　三典獻身取遼東

措辭豪宕、悲壯、讀む者をして感に堪へざらしむ、想ふに十一月二十九日の夜、余、軍管理部に一泊し、再び高崎山に向はんと欲するや、乃木少尉宛の追送品を依託せられ、驟を雇ふて高崎山上の土窟に至る、到れば、少尉既に白骨と化して小櫬の裡に在り、余は副官部の諸君と相顧み暗然として言ふ所を知らず、余の高崎山に客たるや、一夕旅順要塞の夜景を展望せんと欲して、某所の觀測所に泊す。高須大尉余が爲めに教導となりて指示說明頗る懇切を極む、傍に乃木少尉あり、余の親しく語を交へたるは此の時を始とせしが、出征前少尉の屯營せし地は、余が鄕里の隣縣なりしかば話頭は厩城の會遊より高崎市井の雜事に及び、果ては我國將來の軍備問題より惹て議會代議士等の批評に及び、一夜を歡談笑話の裡に送りて余は此時ひそかに沈默謹厚なる青年士官の氣焰に驚かされたりき。

少尉の着用せし外套は、如何にも立派なりしかば、余は時に戲れて言ふやう、こは將官以上の品質にて筋一本の士官には頗る不似合のものならずや、と、少尉眞面目に辯疏して曰く、嘗て父に防寒具を要求せしに斯るものを送り越されたり、父の曰く、立派に過ぎると思ふたならば更に他のものと換ふるゆえ送り返せよ、と申越されしが、

僕等には衣類の善し惡し杯は解らねば其儘着用し居れるなり、と、以て其瀟洒無邪氣なるを察す可し、爾來余が土窟生活の無聊を慰めんとて、種々に歡待を盡されたりしが、近着の新荷到着せりとて、最後に余に贈り越されしはセバストポールの一本なりき、此書は、少尉も好んで愛讀し居りしが、東洋のセバストポール未だ陷らず、而して好愛すべき多血多感の此青年士官は、セバストポールの著者たる歴山王臣下の銃彈の爲めに落命し了んぬ。

余、少尉と交りて僅に一ヶ月、而して余を少尉に紹介せし高須大尉は、同じく二百三攻撃の際右眼を貫かれて命危殆に瀕し、而も少尉陣亡の日と時を同ふす、余は想ふて轉た惆悵の感に堪へざるを覺ゆ。

聞く、十二月二十九日夜、軍司令官の坐下に一人の青年士官來り佇めりと、將軍即ち之を誰何すれば、令息保典氏なり、將軍聲を勵まして曰く、今や戰鬪なり、汝何の暇ありてか乃父に見えんと欲するか、と、少尉答へて曰く、余は本日の戰鬪に不幸創を蒙る、暫時來りて憩はんと欲するなり、と、是に於てか將軍の辭色稍々和ぐ、暫らくして將軍其創狀を檢せんと欲し起たんとすれば何ぞ圖らん是れ一場の夢にてありしと不幸此惡夢遂に讖を爲して、明旦、少尉の訃を聞くに至らんとは、聽くもの誰か悽然として襟を濕ほさざらんや。嗚呼、此一篇の三典歌、能く眞摯にして雅量あり、俠武にして多血、一死國君に酬いんと欲する我日本武士の眞情を發露せるもの、余は、復讀二唱して涙襟を濕ほすを覺えざるなり。

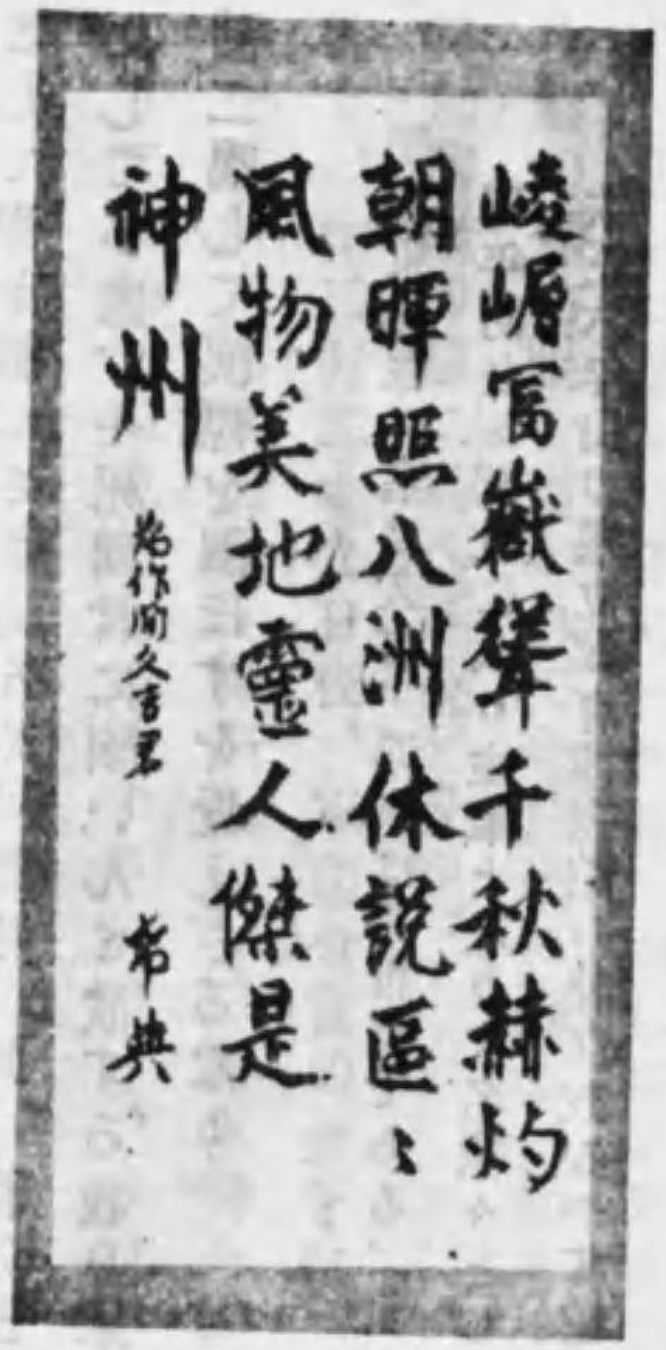
註　作間鴻東先生　名は久吉、鴻東は其雅號である、世々長州藩士、慶應二年山口に生れ、明治二十四年防長新聞社に入り主筆となり文名嘖々として聞えた、明治四十二年山口町長に就任し、大正六年山口縣立教育博物館の設立あるや其館長に任じ、昭和七年三月職を退いて、今、山口市に閑居せらる。

(ロ)　殉死三日前の贈答

大正元年九月十三日の朝、山口町長作間久吉先生の家に、一封の書留郵便が配達された、差出人は東京乃木希典とある。作間先生は嘗て乃木將軍に三典歌を呈賦したことはあるが既に八年前のことで、その他には文通したことも無く、殊に將軍とは面識も無いのに、突

然のこの郵便で、不審に思つたが、當日は恰も 明治天皇御大喪の遙拜式を山口の龜山園で擧行する爲、急いで出勤し、終日の行事を滞りなく果し、夜半過ぎて歸宅した。そしてさてときさの封書を開いて見ると、中には、將軍の筆蹟と、手簡と、横堀氏の書翰とがあつた。

將軍の筆蹟は、竪三尺、横一尺五寸の絖地に、墨痕淋漓として、富嶽の詩一篇が大書してある。



峻嶒富嶽千秋に聳え、
赫灼朝暉八洲を照す、
説くを休めよ區々風物の美、
地靈人傑是れ神州。

手簡は

横堀氏書翰 其儘 貴覽に供候
略儀御免可被下候 頓首 典

とあり、それで横堀氏の書翰が添へてあるわけである。

横堀氏、名は三子、栃木縣の出身、將軍の詩友であつて、九月十日付を以て將軍に一書を送つた。その書中に、

（原文を讀み易く書き流す）

……、昨夜たま／＼舶載の書を繙き候處、詩話中の一節に御家門に關する記事これあり、而して日人某とのことも未だ作者の何人たるをも詳にせず、却つて、將軍には疾くに御承知にあらさせらるべきかとは存じ奉り候へども、頗る其感慨に堪へざるものあり、即ち寫して以て電覽に供し奉り候……

とあり、その書翰に添へて、文中に三典歌を引用した梁香山著の飲氷室詩話卷三二十一葉

の寫しがあつた。

抑も、乃木將軍は、九月十日付の前記横堀氏書翰を讀まるゝや、油然として八年前の作間先生の厚意を想ひ起されたのであらう、直ちに富嶽の詩の大書に、横堀氏書翰を添へて、作間先生に贈られたわけである。

而も將軍は、同時に、横堀氏には、（原文のまゝ）

> 貴翰拜誦　益々御健勝欣賀候　別紙は過日古紙中より見出し置候間供二貴覽一候　現今山口縣山口町長在職の人に御座候　貴翰其儘直に同氏へ郵送仕候　他日回答も有之候得者貴覽に入度と存候　御請答迄　草々頓首
>
> 九月十日　典
>
> 横堀賢兄尊下

と返事を認め、嘗て、明治三十七年十二月、作間先生が將軍に賦呈した三典歌と慰問文をそのまゝ封じて、横堀氏に贈られた。

横堀氏の將軍宛の書翰、それによる將軍の作間先生宛の郵書、又將軍より横堀氏宛の返書の三つ、何れも、九月十日付のスタンプにて、實に將軍殉死の三日前のことである。

（八）後三典歌の詩作

作間先生が、乃木將軍の書留郵便を得られた日は、即ち　明治天皇御大喪の當日で、その日の午後八時、靈轜御發引の合圖の砲聲と共に、乃木將軍は、大君のみあとしたひて逝かれ、靜子夫人もそれを追ふて共々に逝かれたのである。

翌十四日、東京からの電報は、將軍殉死の悲報を傳へ、國民齊しく感動し、感激し、悲痛哀悼して、闔門の心血王事に濺ぎ盡して餘す所無きに、泣かざるものはなかつた。

作間先生は、悲報に接し、果然、思ひ當る節あり、感激の極、更に、後三典歌を賦し、將軍一門の遺烈を弔ひ、之を哀悼せられたのである。

(五) 三典歌餘話

(イ) 富嶽の圖

作間先生の雅友、松林挂月書伯は、現代南畫界の巨匠であるが、恰も將軍殉死の二日前、即ち大正元年九月十一日、筆硯を携へて、伏見宮邸に伺候した。それは、明治天皇御大喪につき英國皇帝御名代として御來朝の、英國皇族アーサーオブコンノート殿下つれづれの御慰めにもと、席畫の御前揮毫のため御旅館にあてられた伏見宮邸に參邸したのである。

するとたまく、コンノート殿下接伴員たる乃木大將も來邸せられて居たが、挂月書伯を見て、突然「富士山を描いて下さらぬか」と賴まれた。挂月書伯は「珍らしい註文をせられたな」と思つたが、早速繪絹をひろげ繪筆に墨汁をたつぷり含ませて、天空に聳え立つ富士の姿を描いてさしあげた。將軍は、欣然「有難う」といつて、これを小さく折疊みポケットに入れて行かれた。

それから二日の後、明治天皇御大喪の涙に曇るしじまをついて、乃木將軍殉死の悲報は電の如く傳へられた。

挂月書伯も、異常に悲痛な感動をうけ、僅か二日前のことが、ありくと思ひ出されて、あり得ることかと疑つたが、さて、それにしてもあの富士山の繪は、どんな御考で註文せられ、その後如何致されたものかと、多少氣懸りになつた。

(讀み且く涙流す)

後日に至つて、その繪は、作間先生に贈られた書と同一のあの富嶽七絶を將軍自ら題し、山本權兵衞大將に遺贈せられたことが判明し、さては左樣であつたかと一層其感銘を深くしたといふ。挂月書伯と作間先生と、後に、此奇しき因緣を語り合つて、書伯は再び富嶽の圖を描き、次のやうに其由緒を題し、作間先生に贈つた。

「大正元年九月十一日、予は、英國皇族の爲めに、伏見宮邸に於て書を作れり。時に、

乃木將軍また座に在り、予に、富嶽の圖を囑す、書成りて後、將軍欣然として、携へ歸り、自ら七絕を題して、山本大將に贈る、實に薨去の前二日なり、當時、吾友鴻東作間君、また將軍の贈を受く、其の詩と、予の畵に題するものと同一なり、君いま其舊因緣を追ふて、予に富嶽の圖を求むること切なり、すなはち喜んで之に應ず、嗚呼、將軍の死や、義氣峻勵、なほ維嶽の巍々として天表に聳ゆるごとし、唯之を仰いでいよ〳〵高きを知るのみ、筆を擱いて當時を追想すれば、又、今昔の感に堪へざるなり。」

註　〇挂月畫伯　姓は松林　名は篤、明治九年山口縣萩に生る、挂月と號し、南宗畫家で、帝國藝術院會員である、東京に住む。

〇山本大將　海軍大將山本權兵衛、鹿兒島の人、累進して海軍大臣となり、日露の役殊に畫策宜しきを得、後內閣總理大臣となつた、昭和八年病歿。

(ロ)　飲氷室文集

作間鴻東先生の嗣子を久幸君といふ、大正の初め、熊本高等學校に在學中、たま〳〵一支那留學生が、「君のお父さんの詩のある書物を上げやう、お父さんに見せなさい」と言つて分厚な一冊の書物を呉れた、見れば飲氷室文集である　作間先生は、かねて梁香山の飲氷室詩話の原著を見度いと思つて居たが、仲々手に入らない。それが、こんなわけで作間先生の手にもたらされたのも奇緣である。

而も、久幸君は、不幸、高等學校卒業を前にして、二豎に冒されて歿し、この文集は思ひ出悲しき遺品となつた。

註　〇飲氷室文集　支那の梁啓超（リヨウケイチヨウ）の著述を集錄した文集で、横堀氏書翰の飲氷室詩話は、その下巻にある。

〇梁啓超　支那近代の學者で、知名の政治家である、近年歿した、號を香山といふ。

(ハ)　資料の保存

前記由來の如く、作間先生の乃木將軍に賦呈した三典歌、殉死三日前に作間先生に贈られた乃木將軍の富嶽七絕、それに就ての將軍の手簡と横堀氏の書翰、將軍殉死に感動して作られた後三典歌、更に松林挂月畫伯の富嶽の圖等は、極めて因緣深く感激に富み、作間先

生一家の家寳として珍重せられるものであるが、又まさに、國民精神教育上の至寳として推賞すべき絶品である。作間先生は、之が永久の保存と、教育上の利用とを、豫て念願して居られたが、偶ま昭和十三年九月十三日、恰も將軍殉死二十六周年の記念日に當り、此等のもの一切を擧げて、本館即ち山口縣立教育博物館に特志寄附せられた。

抑も、作間先生は、本館設立以來、初代の本館館長として十五年間、基礎の確立と經營に盡瘁せられた功績は、まことに著大であるのに、今また、此の好箇の絶品を無償寄附せられたのであつて、寔に感謝に堪へない。

よつて、本館では、此の芳志を空しくせざらん爲、是等絶品の原本は、本館不出の至寳として最も鄭重保存の途を立つると共に、特に複本三部を作製し、其一は作間家に贈呈し、其一は公爵毛利家に贈呈し、其一は本館常時の陳列用とし、何れも原本に準じて之を保存し、天下後世に裨益あらんことに努めて居る次第である。

禁無斷轉載

昭和十六年七月十三日改訂印刷
昭和十六年七月十八日發行

〔非賣品〕

大典記念山口縣立教育博物館
編纂者　主事　惠藤一郎
山口市八幡馬場第七番地

印刷者　共映社　齋藤定熊
山口市下立小路百七番地

發行所　大典記念山口縣立教育博物館

416
231

終